



Title	批判理論に依拠した形象論 : シュヴェッペンホイザー父子を中心に
Author(s)	原, 千史
Citation	形象. 2016, 1, p. 78-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75785
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

批判理論に依拠した形象論

——シュヴェツペンハイザー父子を中心に——

原 千史

はじめに

昨今の形象をめぐる様々な言説において、ドイツでは記号論や現象学に依拠する形象論が先行して議論を展開しており、批判理論に依拠した形象論からは未だ積極的なアプローチがなされていないかのような印象を受ける。批判理論がその初期段階より形象をめぐる思考を積み重ねてきたことは意外と知られていないのではなからうか。批判理論の立場からこれまでいかなる寄与がなされてきたのか、あるいは今後なされるのかについて、ここで今一度再検討してみる必要があるのではなからうか。こうした問題関心のもとに本稿では、ベンヤミンやアドルノらが展開した批判理論における形象をめぐる考察が、それを正統に継承しつつも独自の視点を探り入れる後の世代の研究者たちいかに発展的な形で引き継がれ、今日の形象をめぐる言説においていかなる寄与を

行っているかを、ここ十年ほどの間に批判理論を継承する立場からシュヴェツペンハイザー父子が発表した論考を中心に据えて見てゆきたい。

一、ヘルマン・シュヴェツペンハイザー（一九二八—二〇一五）による形象論

二〇一五年四月に八七歳で没したヘルマン・シュヴェツペンハイザーについて、まず始めにその経歴を略述しておく。一九二八年フランクフルト・アム・マインに生まれ、第二次世界大戦末期には徴兵年齢に満たない十七歳で高射砲部隊補助員として動員され、終戦を迎えている。出身地のフランクフルト大学に入学後、始めはハンス・ゲオルク・ガーター、後にはホルクハイマー、アドルノのもとで哲学を修めた。そ

の後五〇年代には再建された社会研究所やアドルノの哲学研究室で助手を務め、一九六一年にはリューネブルク教育大学（一九八九年リューネブルク大学と改称され、以後哲学科は文化学部にも所属）に新設された哲学講座にアドルノの推挙により招聘される。フランクフルトとの関係はその後も途絶えることなく、一九六六年にはフランクフルト大学客員教授に就任し、それまでハンブルク近郊にあるイギリス軍駐屯地にすぎなかった小都市リューネブルクを「北のフランクフルト」とも呼ばれる批判理論の一拠点に変え、彼の門下からはリューネブルク学派といわれる研究者たちが輩出している。

シュヴェツペンホイザーは一歳年下のハーバースとは一線を画し、ホルクハイマーやアドルノら所謂フランクフルト学派第一世代が展開した批判理論を正統に継承し、批判理論の要請でもあるラディカルな啓蒙、徹底した自己反省と反省性に固執し、理論面のみならず実践面においても、ナチズムの心性からの脱却が遅々として進まない戦後ドイツにあつて、師のアドルノと同様に講義や講演・シンポジウムなどを通じて啓蒙に精力的に取り組んできた。主たる業績としては、友人のロルフ・ティーデマンとともに一九七二年から九九年にかけて編纂した『ヴァルター・ベンヤミン全集』が挙げら

れる。特に晩年の二十年ほどは視覚と形象について活発に考察をめぐらせ、数々の論考を発表している。それらの論考を基に改訂を加えて刊行した著書『思考的直観——直観的思考 Denkendes Anschauen—anschauendes Denken』（二〇〇九年）はヘルマン・シュヴェツペンホイザーによる形象論の集大成であり、「幻像と真の像」（初出二〇〇一年）に始まる十二篇の論考が収められており、その中の一篇が以下で扱う「批判理論における弁証法的形象概念と『弁証法的形象』（初出二〇〇四年）」である。

元々この論攷は二〇〇一年にバート・ホンブルクで開催された哲学会大会での講演原稿に由来し、その後二〇〇三年に『批判理論雑誌』第十六号において縮約された形で発表され、その翌年二〇〇四年に刊行された編著『世界の表象 Representatio mundi』において始めて全編が公表された。シュヴェツペンホイザーがいかにベンヤミンやアドルノらが唱えた批判理論から正統な仕方では形象論を継承しているかを最も端的に示している論考であり、以下にその概略を述べる。

1 思考と直観あるいは概念と形象に見られる相関性と相補性
 先ずシュヴェツペンホイザーは、批判理論に特徴的な認

識の様態を取り上げる。従来、哲学的認識においてはもっぱら概念による悟性的認識が重視され、形象による感性的直観はむしろ等閑にされるか、副次的に扱われてきた。そこで批判理論はこの両者を弁証法的に関係づけ、事柄の把握や認識においては、形象による直観と概念による思考は相関

のかつ相補的な関係にあり、いずれもが本質的な構成要件であると考ええる。批判理論は自己反省と批判を通じて、概念による思考と形象による直観のそれぞれの限界を批判的に規定し、言語の論理性を過度に強調することや、逆に言語の形象性に過大な要求をすることをいずれも拒否する。有限者と無限者を分数の関係のもとに説明したシェリングを引き合いに出してシュヴェツペンホイザーは、概念と形象との差異や断絶を強調するというよりもむしろ両者の相関性や連続性を際立たせる。事柄の認識と知覚は、概念においても形象においても両者に共通する言語（概念の場合は言葉という言葉 *Wortsprache*、形象の場合は非言語的言語）を媒介にして、間接的になされる。事柄の意味 *Bedeutung* を論理的に明示する概念、ならびに事柄の解釈されるべき眺め *Ansicht* を提示する形象という、アンビヴァレントな関係にある両者に対して批判理論は、観察的思考 *betrachtendes Denken*

こそが認識の対象である事柄に相応しいと考える。観相学 *Physiognomie* とも近い関係にある批判理論に特徴的なこの類比的・弁証法的思考にとつて、形式論理に囚われた思考では決して許されない事柄の多義性はむしろ望ましいものと考えられる。

以上のように批判理論においては思考的直観と直観的思考は相補的な関係にあり、認識は概念と形象の両者を限定された否定 *bestimmte Negation* によって配合した混合形態 *Mischfiguren* として現れる。そうした認識の理想を批判理論は「名 *Name* というユートピア」に見出す。名において概念と事柄は分かちがたく結合していると同時に事柄の具体性や直観性も保たれており、概念と直観された事柄とが内的に通じているからである。

2 批判理論における弁証法的形象概念

形象は上で見たように概念との相補的關係において認識に関与する。自己反省と批判を主軸とする批判理論においては形象全てを肯定的に捉えてはおらず、形象を批判的・否定的に捉えることを重視する。そこでまず限定的否定の対象となるのが模写・模像 *Abbild* としての形象である。ただ事実と

されるものを複写するだけで、実在の表現である原像 Urbild を隠蔽しその認識を妨げる模像は、現実の深層構造を覆い隠す像 Deckbild としてリアリズムが多用する形象であり、批判理論はその初期より終始一貫してこれに批判を加えている。さらにシュヴェッペンホイザーはこれに類した形象として似姿 Ebenbild や鏡像 Spiegelbild も取り上げ、こうした形象が人間の創造力・天才を神の属性の反映とみるロマン主義に由来する創造性のイデオロギーに加担して欺瞞的・歪曲的機能を果たしている点を批判する。そこでは事柄の真の像 Wahrbild と幻像 Wahnbild との区別が無効となり、現実と仮象との取り違い Quidproquo が起きているからだ。

さらに道徳的行動の指針としての模範 Leibbild、Vorbild に対しても批判理論は反省を加え、権威を求めたがり権威に対して従順で無批判な心性（それはファシズムを醸成する下地となる）をもたらすものとして模範という形象にも批判的眼差しを向ける。

以上のように形象の様々な類概念に限定的否定を加えた上で、批判理論が堅持する弁証法的な形象概念とは一体いかなるものか。それはいずれも現象 Erscheinung に関与する仮象 Schein や出現 apparition といった概念である。本質と存

在は仮象において現象する。批判理論にとって最も重要な形象とは、幻影 Phantasmagorie として人を欺く仮象ではなく、本質や存在を開き示す仮象 apophantischer Schein である。またそうした仮象を解釈 deuten する際に不可欠とされるのがアドルノの言う布置的思考 konstellatives Denken である。それは実験に似た認識であり、モデルとしての断章やエッセーこそ、そうした認識に相応しい叙述スタイルとなる。

3 「弁証法的形象 dialektisches Bild」という概念

ベンヤミンに由来するこの概念については、シュヴェッペンホイザーの言葉通り、批判理論の中でも今日までその定義に関しては論議の的になってきた。弁証法的形象は特殊な知覚、個々の主体あるいは集団的主体の構想力にその起源をもち、個別的主体の記憶内容として自我の意識または無意識の領域に由来し、集団的主体の場合は間主体的に共有された意識あるいは無意識の記憶の痕跡と考えられる。夢の形象 Traumbild とも言われ、無意識的に現前し主体に降り懸かる「意識の所与、事実」あるいは意識的に想像されたものとも言われる。夢・記憶に現れた真正な客観的歴史像の弁証法的構築を主張したアドルノに対して、ベンヤミンは意識に事実

として与えられた形象のうちにあるショックや異化効果を及ぼす形象要素 *Bildelement* に固執した。真正な歴史的形象である弁証法的形象は個々のまたは集団の主体に危機的な状況で閃き、その光が輝き出す瞬間に歴史を静止させる。その状態は静止した弁証法 *Dialektik im Stillstand* とも呼ばれ、ここに現れる歴史的形象という文字 *Schrift* を解読し、この文字で表現された言語を翻訳しうる者こそ真の歴史家だとベンヤミンは考える。

二、ゲルハルト・シュヴェッペンハイザー（一九六〇）による形象論

次に、ヘルマン・シュヴェッペンハイザーの子で、近年形象に関する論考を集めた単著『形象の障害と反省 *Bildstörung und Reflexion*』（二〇一三年）を刊行したゲルハルト・シュヴェッペンハイザーについて簡単にその経歴を紹介したい。批判理論を継承する世代としては『アドルノ』の著者で知られる社会学者シュテファン・ミュラー＝ドーム（一九四二～）よりも若い世代に属すゲルハルト・シュヴェッ

ペンハイザーは、一九六〇年フランクフルト・アム・マインに生まれ、ハンブルク大学で哲学、ドイツ文学、教育学を修め一九九二年同大学で哲学の学位を得た後、二〇〇〇年にはカッセル大学で教授資格を取得している。ハノーファー、カッセル、ヴァイマル、ドレーズデンなどの各大学で教鞭を執った後、二〇〇二年以後はヴュルツブルク・シュヴァインフルト応用科学大学造形学部の教授としてデザイン、コミュニケーションおよびメディアについて講じている。一九九五年リューネブルクで創刊された『批判理論雑誌 *Zeitschrift für kritische Theorie*』には刊行当初から編者として携わり、現在もなお刊行を続けている。日本では彼の著書として『アドルノ——解放の弁証法』（徳永恂・山口祐弘訳、作品社、二〇〇〇年）が刊行されている。

本稿では上記『形象の障害と反省』に収録されている十一篇の論考の一つ「形象の非同人性 批判理論の形象概念について」⁽²⁾を取り上げる。この論文は二〇〇九年ヴッパータール大学哲学研究室で行った講演を元にして書かれた二篇の論考、つまり二〇一〇年『文化哲学雑誌』第四巻第二号に掲載された「批判理論の形象概念についての考察」、および同年に刊行されたS・ノイバーらによる編著『思考像としての

形象 *Das Bild als Denkfigur*』に寄稿した「形象の非同一性アドルノの形象概念について」を元に加筆修正を加えたものである。それまで批判理論の形象論についてシュヴェッペンホイザーが考察してきたことを総括する質量共に最も充実した論考で、今日の批判理論に依拠した形象論を知る上で必要な位置を占めている。

この論考は内容に即して以下の三つの部分に大別することができる。すなわち、形象をめぐる今日の様々な理論的アプローチとその問題点を概観した部分、次に批判理論でこれまで用いられてきた形象概念を整理して再構成した中心的部分、そして今日の形象論において批判理論はいかなる寄与ができるのかを論じた部分である。

1 今日の形象をめぐる議論の盲点および様々な理論に依拠する形象論

冒頭で「美術史は現在の状況に即した形象概念の展開を等閑にしてきた」という美術史家の言葉が引かれ、今日のイメージをめぐる現象はもはや伝統的形象概念では把握不可能となっていることが確認される。そうした昨今の状況に対して、批判理論からのアプローチはほとんどなされていないと

シュヴェッペンホイザーは断じ、形象概念が批判理論にとって周縁であるどころか、むしろアドルノ、ベンヤミン、ホルクハイマーらにおいて、美学はもとより歴史哲学、文化批判、知覚論・認識論において頻繁に形象への言及がなされている事実を鑑みれば、奇異に映ると述べる。その理由の一端は、首尾一貫した理論を基礎にした形象概念が確立されておらず、また批判理論に独自の方法、つまり定義に現象を従属させるのではなく、現象をして自らを語らしめるそのやり方にあると考えられる。分析と批判の統合を要請し、体系性の抑圧に抗する批判理論に対しても、内在的批判を通して得た洞察を提示する際には相応の一貫した連関が要求される。そこで本論考では昨今の形象論にみられる盲点ともいえる形象概念の狭隘な捉え方に対して、批判理論に依拠した社会学的観点を導入することで、形象概念をめぐる議論に寄与することが企図される。

シュヴェッペンホイザーはまずこれまで様々な理論がいかに形象概念を捉えてきたかを略述する。文化学における *iconic turn* のパイオニアといえる W・J・T・ミッチェルによるイメージの五分類を挙げて、美学での議論において形象概念は多義性を排除するためにも限定して「絵画的方法で何

かを再現する形成物 Artefakte」とすることを提唱する。また哲学の議論においては、知覚や表象はもとより何かの描写・表現 Darstellung も形象には含まれるゆえに「何かを視覚的に visuell 再現表象する支持媒体と結びついた形成物」と規定する。

記号論では言語表現との類比の下に形象を図像的表現として解釈することが目指されるが、形象はそこでは多岐にわたる記号体系の一部分にすぎず、さらに言語的記号体系と比べて内的関係性もさほど規定可能とはいえない。これに對して現象学においては、形象が必ずしも何かの記号であるとは限らないというところから出発し、形象とは可視的对象 sichtbare Gegenstände であり、實在を可視化するものと捉えられている。このように今日、形象をめぐる哲学的議論は大きく二つの立場に分かれ、互いに排斥しあっているという。

2 批判理論における形象概念

シュヴェッペンハイザーは批判理論にも確かに存在する形象概念について、多層的で内的対立をはらんでいるために必ずしも明瞭に認識しようとは限らないと断った上で、その特徴を次のよう定式化している。すなわち、批判理論における

形象とは「現にある姿 was sie sind」にとどまらず「あり得る姿 was sie sein können」でもあり、視覚的なものの現在の次元と可能性の次元との差異のうちに、形象にみられる緊張をはらんだ非同一次性の本質がある、と。

以上のように批判理論における形象概念の全体的特徴を述べたのちにシュヴェッペンハイザーは、批判理論で扱われる形象概念を以下の五つの観点から考察する。まずはホルクハイマー／アドルノにおける「美的形象」概念であり、次にベンヤミン、アドルノにおける叙述的性格をもった「弁証法的形象」、そしてアドルノによる「形象批判 Bildkritik」、さらに『啓蒙の弁証法』中の反ユダヤ主義の理論で用いられた「投影像 Projektionsbild」、最後に文化形成における反復強迫 Wiederholungszwang に着目するクリストフ・テュルケにおいて中心的役割を演じる形象概念である。

① 美的形象 ホルクハイマーは何よりも現実を異化する作用を美的形象に見出そうとする。美的形象は可能な別の状態への希望を投影しており、疎外されて偽りに満ちた現存する社会に対する個人の抵抗の源泉となりうることを強調する。これに対してアドルノは形象による異化効果の力は、対象的なものから解放たれていないゆえに楽音に比べて限定

されているという。むしろアドルノは自然美や芸術美の単なる模写に対してそれらが現象する際の形象性を擁護する。美的形象はその現象の際に現存するものを超えたより以上のもの、決して存在したことの無い原像へのユートピア的先取りとなるからだ。しかし宥和の形象としての美的形象にも弁証法が内在している。ミメーシスと合理性の弁証法である。自然支配を行う合理性が自然の抑圧という盲目的契機を宿しているかぎり、芸術作品における合理的構成は暴力的関係であり続ける。その一方でミメーシスという魔術的・前合理的契機は芸術をさらに形象放棄へと追いやる秩序的合理性に対してその正当性を保持する。アドルノは没落の形象 *Bild des Intergangs*、全面的破局の可能性の形象だけが新たな、現存するものとは違うものの暗号と言えると述べ、その際には視覚的形象というよりはむしろベケットやシェーンベルクなどの文学的または音楽的形象を念頭に置いている。

② 論述的な「弁証法的形象」 これについては上述のヘルマン・シュヴェツペンホイザーによる「弁証法的形象」の解説との重複部分が多いので解説は避け、要点のみを略述したい。ここでもベンヤミンとアドルノにおける弁証法的形象の理解の差異、すなわち突如としてショックとともに主体

に降りかかる（ベンヤミン）のか、それとも主体による反省を経た構成として生ずる（アドルノ）のかという差異が強調されている。いずれにせよ歴史的形象が問題となり、概念的部分と視覚的部分から成り、そこにおいて過去と現在とが瞬間的に結びつき布置を形成する。そしてその布置を解釈することが史的唯物論の課題となる。ベンヤミンやアドルノにおいて形象は文字のごとき記号連関であり形象とテキスト *Schrift* との対立を解消する弁証法的概念と言える。S・ランガーによる区別に従うなら、テキストは論述的記号として、部分に分かれ順を追って展開されるのに対して、形象は提示的記号として、全体が完全な形で同時に提示されると考えられる。こうした区別は批判理論においては明確に規定されていないが、しかし種々の形象現象の中の内的対立を記述しコンテキストへと置換しうる強みがある。

③ 形象批判 形象禁止を唱えたアドルノによる形象批判の系譜をシュヴェツペンホイザーは、聖俗権力による形象の濫用を批判し偶像は精神の従属と迷信を助長させるとしたカント、さらには礼拝に形象は余計なものとしたルターにまで遡る。アドルノは形象を現実の忠実な再現描写あるいは複写とするリアリズムに対して、現実をイデオロギー化して視覚

的無意識まで植民地化していると批判する。さらにアドルノは旧約以来の偶像禁止のモチーフを自らの社会哲学において解釈しなおし、社会のユートピアは形象により描写されてはならず、ただ概念を通して現存するものを限定的に否定することでのみ示されると説く。しかしその際にアドルノは形象を全面否定しているのではなく、現実の複写として意識操作を行う仮象に限定して否定し、自律的芸術において現象する真正な表現としての形象は擁護していることに留意すべきだとシュヴェッペンホイザーは言う。

④ **社会病理の形象としての投影像** ホルクハイマー／アドルノは『啓蒙の弁証法』中の「反ユダヤ主義の諸要素」において人が判断する際の知覚・表象・概念の関係を論じている。彼らは知覚像には無意識下に概念的要素が含まれていることに注目し、知覚とは単に外的印象を受動的に記録することではなく、そこには投影すなわち能動的解釈や秩序付けおよび構成が行われていることを明らかにする。社会が組織的にバラノイアに駆られている時代にあつては投影のない知覚など存在しないという事実すら歪曲される危険がある。こうした反省に基づいて自己の世界像を相対化し他者の世界像をも認識することに努めることで、暴力や支配とは無縁の形象

を持ちうる。

⑤ **文化形成に関わる生ける lebendige 形象とトラウマの反復強迫** 批判理論を標榜する哲学者クリストフ・テュルケ（一九四八～）は『啓蒙の弁証法』中のニーチェやフロイトに関する記述から着想を得た生贄の文化理論において批判理論の形象概念をさらに拡げている。テュルケによれば太古に経験した自然の恐怖を、人類は記憶を通じて現前化させることで耐えられるものにしてきたという。文化形成過程でその恐怖は徐々に象徴化されていき、その際に形象性が鍵となる役割を演じている。表象や思考の基礎となる心的形象 *mentales Bild* は幻覚に由来するとテュルケは考え、幻覚は神経を昂ぶらせる刺激を視覚的形態で心的に表象する際の初期症状とされる。その幻覚を明確な輪郭をもつ表象像へと昇華させるための社会的文化的空間こそが生贄をささげる祭壇という儀式の場であった。生贄を捧げるという形をとって自然から受けた太古の恐怖の経験（トラウマ）を様式化して繰り返すなかで、文化が形成されてきたとテュルケは考える。

3 **批判理論が重視する形象の非同一性**

ベンヤミンやアドルノの考える形象はカントの唱えた図式

Schematismus に類似している点にシュヴェッペンホイザーは言及し、直感的視覚的形成物の根底にある弁証法的な概念構造を説明することこそ、形象を文字のごとき記号で媒介されたものとして記述することだという。

形象は決して単にミメーシスのものではなく、常に合理的に構成されたものでもあり、そこにも形象の非同一性を見出すことができる。形象はまた代理表象 *Repräsentation* とも複雑に関係しており、表象は三つの相、つまり心的表象 *Vorstellung*、描写 *Darstellung*、代理 *Stellvertretung* に分類できる。心的表象は内的形象と、描写は複製的形象と、代理は記号としての形象とそれぞれ関係している。

批判理論の重視する形象の非同一性は、形象が記号論のいう単なる情報媒体であると同時に、現象学が唱える視覚可能なもの *Objekt* でもある点に端的に表れており、批判理論はこの非同一的な形象概念を提示することで、今日の形象をめぐる議論に見られる両極端な見方、互いに排斥しあう記号論的観点と現象学的観点とを架橋する役割を果たしていると考えられる。さらにシュヴェッペンホイザーはコミュニケーションシヨンの視点も形象論に導入して、「視覚的コミュニケーションシヨンの批判的解釈学」なるものも提唱しており、今後の研

究が期待される。

おわりに

これまでシュヴェッペンホイザー父子による批判理論に依拠した形象論を見てきたが、アドルノら批判理論第一世代の講筵に列した父のヘルマンは哲学と美学の領域にわたって主として認識論的考察に重きを置いてオーソドックスに形象を概念との関係において論じているのとは対照的に、第三世代に属する子のゲルハルトはハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論も含めて、社会学や社会心理学の領域にも視野を広げて形象を論じている姿が浮き彫りになる。ベンヤミンらの認識論を引き継いで認識のユートピアを名に見出し、本質を開示する形象すなわち「弁証法的形象」に力点を置いて論じているヘルマンに対して、ゲルハルトは形象の特性を非同一性に求め、現にある状態と可能な状態との弁証法的緊張関係に着目する。そして形象を単なる記号、あるいは視覚を可視化するものへと還元する昨今の形象論に見られる単層的捉え方に対して、形象におけるズレや差異に着目して形象をまさに多層的に捉え得る点にこそ、批判理論に依拠した形象論の強みがあると考ええる。形象をより広い学問的背景のもと

で捉え直し、時代のアクチュアルな要請に応じて理論を展開させていくところ、ただ理論を無批判に引き継ぎ墨守するのではなく、常に自己や現状に対して反省的・批判的に関与することを旨とする批判理論を標榜する理論家に課せられた課題だと考えられる。

註

- (1) Hermann Schweppenhäuser: Dialektischer Bildbegriff und ‚dialektisches Bild‘ in der Kritischen Theorie. In: Denkende Anschauung - anschauendes Denken. Kritisch-ästhetische Studien über die Komplementarität sensativer und intellektiver Relationen. LIT Verlag(Münster), 2009, SS.57-98.
- (2) Gerhard Schweppenhäuser: Die Nichtidentität des Bildes — Zum Bildbegriff der Kritischen Theorie. In: Bildstörung und Reflexion. Studien zur kritischen Theorie der visuellen Kultur. Königshausen & Neumann(Würzburg) 2013, SS.148-169.